

ハーバード大学への派遣について

星野靖二

はじめに

執筆者は、国学院大学とハーバード大学ライシャワー日本研究所との研究協定に基づき、2011年4月より2013年3月にかけての2年間、国学院大学より派遣されて同研究所に客員研究員として滞在して研究する機会を得た。派遣の目的は大きく二点あり、第一点は北米における日本研究、特に文化・宗教に関する研究状況の調査、第二点は19世紀後半から20世紀初頭にかけてニューイングランド地方で学んだ日本人留学生についての調査である。第一点については別稿にまとめる予定となっているため、以下では第二点目の調査結果に言及しながら、執筆者の現地での活動の概要について報告する。

ライシャワー日本研究所について

最初にライシャワー日本研究所 (E. O. Reischauer Institute of Japanese Studies) について簡単に紹介しておきたい。ライシャワー日本研究所は (以下「研究所」) は、その名の通り日本研究に焦点をあてた研究機関であり、もともと1973年に日本研究所 (Japan Institute) としてハーバード大学内に設立された。その設立に尽力し、所長も務めたエドウィン・O・ライシャワー氏を記念して1985年に改称して現在の名称となっており、本年2013年に40周年を迎えることとなる。

研究所と本学との研究協定についていえば、研究所側からは北米における神道・日本

宗教研究の第一人者であるヘレン・ハーデカ氏に特に助力して頂いている。執筆者の滞在中にも色々とお気配りして頂き、また研究上でも有益な示唆を受けたことを、ここに感謝と共に記しておく。

研究所の通常の活動としては、客員研究員やポスト・ドクター研究員を受け入れながら、独自に研究事業を推進し、また定期的にシンポジウムやフォーラムを開催している。独自の研究事業の例として、例えば東日本大震災の直後から日米の他の諸機関・グループと連携を取りつつ構築している2011年東日本大震災デジタルアーカイブ (参照: <http://jdarchive.org/ja/home>) を挙げる事ができる。同アーカイブは現在進行形で整備されているが、特にアンドリュー・ゴードン氏 (2011~12年度の所長) は同事業を積極的に推進している。

また、学期中には毎週金曜日の午後に講師を一名招いてジャパン・フォーラムという小規模なフォーラムを開催している。講師は研究所のポスト・ドクター研究員から他の大学機関における日本研究者まで多岐に渡っており、また聴衆側を見てもハーバード大学学内からの研究者・学生はもちろん、近郊の大学からも研究者や学生が聞きに来ていた。同フォーラムは1974年から続く伝統あるものであり、講師として招かれるのは名誉なことであると聞いた。それもあって同フォーラムは研究所が北米の日本研究者間にネットワークを形成するのに貢献しているという印象を受けた。

研究所に学生は所属していないが、研究所

所属の教員達はハーバード大学内の教養学部／大学院 (Faculty / Graduate School of Arts and Sciences) や東アジア言語文明学科 (Department of East Asian Languages and Civilizations) 等にも関わっており、連携しながら教育活動にも従事している。これに関して、執筆者は滞在中にハーデカ氏のゼミ・講義を聴講する機会に恵まれた。これについては後述する。

活動報告

以下、時系列に沿って現地での活動の概要を記す。

2011 年春学期

ハーバード大学の学年暦は9月が年度の始まりで、9月から12月までが秋学期、2月から5月までが春学期となっている。故に執筆者が着任した4月は春学期の半ばであり、またハーデカ氏が研究休暇中であったこともあって、この学期は特に講義の聴講はせず、毎週のように行われるシンポジウムやセミナーなどに参加し、また6月末に台湾で行われた国際仏教学会にてハワイ大学のミシェル・モール氏が企画したパネルに参加し、“‘Rational Religion’ and the Shin Bukkyo [New Buddhism] Movement in Late Meiji Japan 明治後期の新仏教運動における「合理的宗教」”という題で、近代日本の仏教改良運動とそこに見られる「合理性」について発表した。

2011 年秋学期

秋学期にはハーデカ氏の大学院ゼミを聴講することにした。ゼミの題目は“Secularism Beyond the West 非西洋地域における世俗主義”であり、チャールズ・テイラーの『世俗の時代』——テイラーは自らの議論が「西洋」に限定されるものであると明言している

——を読んだ上で、他の世俗主義についての研究を読み合わせ、テイラーらの議論がどこまで非西洋地域において適用され得るのかについて論じるものであった。読書速度も言語運用能力も高度なものが要求され、どれだけついていけていたのか心許ないところはあるが、ゼミとその延長戦——しばしばクイーンズヘッドという大学内のパブで行われた——は良い刺激となった。ちょうどこの時期は、国学院から出版助成を頂戴した拙著の校正作業と並行してのゼミ聴講であり、また派遣の第一の目的と関連して幾つかの学会に参加したりもしたが、忙しくも充実した日々であったことが思い出される。

2012 年春学期

この学期には、ハーデカ氏の神道の講義に加えて、ダン・マクカナン氏の19世紀のユニテリアン・ユニバーサリスト思想という講義と、デビッド・ホール氏のアメリカ宗教史の講義を聴講した。しかしながら、4月に他の大学で発表する機会を二度頂いたため、その準備に時間を取られ、講義の理解が中途半端になってしまったことが心残りである。最初の発表はプリンストン大学の仏教研究ワークショップでのもので、これは以前国学院の日本文化研究所に勤務し、現在同大学の博士課程で学んでいるジョリオン・トーマス氏の力添えによる。次の発表はアマースト大学のアジア言語文明学部でのもので、同大学の教員であるトレント・マクシー氏によって企画されたものであった。発表題目は“Why New Buddhism? Modernity and the Buddhist Reform Movement in Modern Japan なぜ新仏教なのか——近代日本における仏教改良運動と近代性”とし、明治後期の『新仏教』へとつながっていく明治中期以降の日本の仏教改良運動について概観した。討議ではやはり他の地域における仏教伝統との比較が話題となった。

2012 年秋学期

渡米後から滞在中に研究所で一度発表を行うということでハーデカ氏と調整しており、それがこの9月の学期開始直後に設定された。前述したように派遣の目的の一つが日本人留学生についての調査であったため、これについて発表することとし、ハーバード大学のアーカイブにおいて調査を行った。当初は日本における宗教学の成立に大きな役割を果たした岸本能武太（ハーバード大学神学部と大学院に1890年から1894年にかけて在籍）に焦点を合わせるつもりであったが、調べていくうちに岸本と同時期に在学していた小崎成章という人物の存在が判明した（小崎は神学部と大学院に1890年から1893年にかけて在籍）。

この小崎は、1891年6月24日に行われたハーバード大学の卒業式において、神学部から選出されて「Influences Bearing Upon Christian Thought In Japan 日本においてキリスト教思想に影響を与えるもの」という題で卒業演説を行っている。これに留学生が選ばれるのは珍しいことであったようで、この件は当時の新聞記事となって何紙かに報道されていた。この小崎について、現地で見ることができる範囲での日本側の先行研究——ハーバード大学の燕京図書館は北米有数の日本語蔵書を誇っている——ではほとんど言及がなかったが、しかし同時代資料から同志社の二代目総長を務めた小崎弘道の実弟であること、また後に旧制七高で英語教授となることなどがわかった。なお、執筆者は帰国後も引き続き小崎について調査を続けている。

アーカイブとオンライン・データベースでの調査の結果、前述小崎の卒業演説を含めて、小崎や岸本が英文で発表した論説を数編入手することができたので、それらに見られる宗教理解に焦点を合わせて内容を検討し、9月に“Envisioning the Future Religion : Japanese Intellectuals and American Reli-

gious Liberals in the Late 19th Century 将来の宗教の構想——19世紀末における日本の知識人達とアメリカの自由主義的な宗教者達”という発表を研究所で行った。発表後、ハーデカ氏とも相談し、講義の聴講はせずにこの学期は更に調査を進めることとし、10月にはアマースト大学で開催されたアジア学会ニューイングランド支部会でも発表を行った。いずれの発表でも、日本人留学生側の事情に加えて受け入れ側である米国の自由主義的な宗教者達の思惑についても触れ、討議でも興味深い論点であるという話になった。この、より広くは米国宗教史上における日本宗教理解といった論点につながる問題については、今後掘り下げて検討していきたい。

2013 年春学期

1月に前述した東日本大震災デジタルアーカイブとの関係で“Opportunities and Challenges of Participatory Digital Archives: Lessons from the March 11, 2011 Great Eastern Japan Disaster 参加型デジタルアーカイブの活用と課題：2011年3月11日東日本大震災からの教訓”というシンポジウムが開催されることになり、そこに本学の黒崎浩行氏が参加して“Relief Activities by Religious Organizations 宗教団体による救援活動”という題で発表した。

これと関連させて、国学院側からの企画として、研究所において「國學院大學における日本宗教研究の最先端」と題する小規模なワークショップを行うこととなった。目的は、ハーバード周辺の若手日本研究者に国学院における日本研究の状況を知ってもらうというもので、今後のより充実した研究交流につなげていきたいという考えがあった。国学院からの参加者は菅浩二氏・大東敬明氏・黒崎氏に執筆者の四名であり、それぞれ「東日本大震災における宗教者の支援活動と研究者の後方支援」（黒崎氏）、「神道史における仏

教儀礼」(大東氏)、「『国家神道』概念の有効性について——日本の研究の現状から」(菅氏)、「19世紀末米国における日本宗教の提示」(執筆者)という発表を行った。参加者は何らかの日本研究に関わる大学院生が中心であり、発表後に意見交換を行って交流を深めることができた。

おわりに

思い起こせばあっという間の二年間であったが、様々な方面で良い刺激を受けることが

できた。特に、ハーデカ氏のゼミへの参加は大変有益な経験であり、今後の教育・研究に生かしていきたい。また、アーカイブでの日本人留学生についての調査で、小崎成章についての資料を発見したことは想定外の喜びであった。関連資料を未だ十分に検討できていないが、いずれ何らかの形でまとめたいと考えている。

最後に、今回の派遣を支えて頂いた國學院大學の関係者の皆様に感謝の意を記して、この稿を閉じたい。